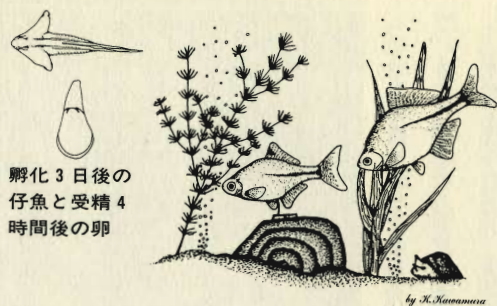


かつては招かれざる客

世の中はまったく身勝手なもので、多すぎても困るが逆にいなくなっても困るものがあります。これからお話するタイリクバラタナゴがまさにそれです。タナゴといっても、海にいるウミタナゴではありません。ここでいうタナゴとは、淡水産の小魚の一種でコイの仲間です。

タナゴ類には二つの特徴があります。一つは産卵期になると雄に婚姻色と呼ばれる種特有の美しい色彩が見られることで、もう一つは雌が二枚貝の中に産卵することです。これらの特徴は、多くの淡水魚マニアを引きつけています。タイリクバラタナゴはその名のとおり中国大陸原産で、日本にはいなかったものです。タイリクバラタナゴは第二次世界大戦中、ソウギョ、ハクレンなどの稚魚に混じって最初は関東地方に持ち込まれ、その後、徐々に分布を拡大し、一九七〇年代後半には日本のあちこちで見られるようになりました。ところがその過程で問題になったのが、日本にもともといたニッポンバラタナゴとの関係です。

両者は分類学的には同種別亜種の関係にあり、形態的には若干異なるものの容易に交雑します。そのためいったんタイリクバラタナゴが入ってしまうと、本来そこにいたニッポンバラタナゴの純系はいなくなってしまうのです。おかげで現在、ニッポンバラタナゴと呼べるものはごく限られた場所で見られなくなっています。タイリクバラタナゴが急速に分布を拡大した最大の理由は、その生命力と繁殖力にあります。



タイリクバラタナゴの産卵行動(左が雌)

す。日本産タナゴ類の場合、産卵期は春ないしは秋に限られるのに対し、この魚では春から秋にわたり、しかも地方によっては一年に二世代送るものさえいます。このようにタイリクバラタナゴは日本の淡水生態系をおびやかす厄介な存在なのです。

ところがひょうたんから駒とでもいうのでしょうか、この魚は意外なところで役に立つことがわかりました。それは、生物実験に使えるということです。水温と日長を調整することにより産卵は完全にコントロールできます。また、産卵管の長さから生殖周期が確実にわかります。卵は大型で粘着性がないので扱いやすく、条件によっては受精後一日で孵化し、三カ月で成熟させることもできます。タイリクバラタナゴは生物実験、特に発生の実験に関して絶好の材料だったのです。

これがわかったのは一九八〇年代に入ってからですが、世の中は皮肉なもので、このころになると、かつてあれだけいたはずのタイリクバラタナゴがあちこちから姿を消しはじめたのです。原因はよくわかってはいませんが、一説にはブラックバスの食害によるとされています。いるときには疎まれ、逆にいなくなると惜しまれる。これは別に人間に限ったことでもないようです。

(河村功一)